

「浮田要三と『きりん』展（法人事業3をめぐって）」

昨年11月23日（祝）、24日（水）の二日をかけて、大阪と京都を訪問しました。

目的は、今年9月開催予定の「浮田要三と『きりん』（仮称）」と銘打った展覧会に向けた準備のためです。メンバーは小海町高原美術館から名取館長と中嶋学芸員、当法人から宮尾の3名。訪問先は、浮田要三氏のご親族と研究者の扉野良人氏でした。

法人の掲げる事業の柱の一つに「意思決定できる『個』の育ちを支える文化紹介」とあります。ぶれジョブの中心理念でありながら十分に理解されて来なかったと思われるテーマですが、今回の展覧会の準備から運営までに至る過程（プロセス）を通して、必ずや皆さんにその真意を理解していただけるものと確信しています。

法人理事の西と宮尾が児童詩誌『きりん』の存在を知ったのは、広範な児童文学書を編集出版して来られた理論社を創業された小宮山量平氏（故人）の私設博物館 Editor's Museum 『小宮山量平の編集室』にご長女の荒井きぬ枝さんをお訪ねした時のことでした。

当時毎日新聞大阪本社に勤務していた井上靖の呼びかけで、『きりん』が創刊されたのは1948（昭和23）年のことでした。関西を中心に、小学生の絵画や詩（作文）を集めて月刊誌の形式で編集・出版し続けましたが、1962（昭和37）年に理論社に委ねられるまでの14年間、浮田要三氏が星芳郎氏と共にその実務を担われたのでした。

浮田氏は、神戸をはじめ京阪地域をバイクで廻り、教室から子どもたちの絵や詩を集め、それらが載った『きりん』を配達されました。当時、彼を夢中にさせたのは、『きりん』という『場』で交感された、子どもと大人の違いを超えて対等な独立した『個』としての人間どうしによる熱の籠った出会いのドラマだったと思われます。

「こどもの本質と、大人＝人間としての本質が結ばれるなかでうまれた行為、その結果としてのこどもの作品」（浮田要三）

この明晰な表現にその世界が活写されていますが、ここにはぶれジョブという舞台装置の内に生起する一期一会の出来事に相通じる空気が感じられはしないでしょうか？

子どもが、大人の所有物や愛玩物でない、同じ一人の『個』として尊敬されていること。この当り前のことが、実は長い間、軽んじられ、踏みにじられて来ました。けれども、詩誌『きりん』に掲載された名も無い子どもたちの詩には、人間の尊厳が感じられます。

幸いなことに、西と宮尾はその最晩年に浮田氏に知己を得ることを許されました。障害者を含め何人かの近しい仲間が自由に自分の絵を描くことの許された『アトリエ UKITA』に氏を訪ねた数時間のことは、生涯忘れないでしょう。そこにはぶれジョブが生き活きと躍動する時と同じく、本当の意味での「遊び（あそび）」が充満していたのです。

これから、再度大阪を訪ねて展示作品を選び、「浮田要三と『きりん』」の世界を再現するための展示空間を創り出すという重要な作業が待っています。浮田さんの人間を問う姿勢には、ぶれジョブが目指そうとする「人と人とのつながり」に直結する哲学があります。